

在米日本古写真資料に写る交流の記憶

—古写真の中にもみる国際交流と異文化理解のかたち—

研谷 紀夫*

要 旨

本論では在米日本古資料調査の中で確認された日本と諸外国との国際交流を示す写真資料に着目し、それらの写真資料が過去の交流の場面をより具体的に想起させる特質を考察する。そして写真資料から見える交流のかたちを分類し、各ジャンルにおける写真資料の米国内における保存・公開状況を概説する。その上で、国際交流や異文化接触の足跡を辿ることのできる写真資料のアーカイビングやドキュメンテーションが今後どのようにあるべきかについて考察する。

キーワード：古写真，アーカイブ，記憶

Memories of exchange in Japanese photographs in the United States of America

—International exchange and intercultural understanding through
old photographs—

Norio TOGIYA

Abstract

This study represents ongoing research on a collection of old Japanese photographs in the United States of America (USA), with particular attention to their feature as a specific locus for past international exchange between foreign countries. This study explains the patterns of intercultural exchange that appear in these photographs as well as their preservation and publication by genre in the USA. Furthermore, ideal methods for the future preservation and documentation of these photographs to elucidate the past processes of international exchange and intercultural understanding are also considered.

Keywords: old photograph, archive, memory

*関西大学総合情報学部

1. 研究の背景

筆者は現在科学研究費補助金などの支援を受けて、米国と英国の各機関に保存されている、日本の戦前期の古写真資料の保存と、デジタル化の状況に関する調査を実施している。本調査における調査範囲は幕末から第二次世界大戦が勃発する1939年末までに、日本で撮影された写真か、海外において日本人や外国へ移住をした日本人などを写した写真と定義している。しかし、実際の調査においては厳密にその範囲を分けることが難しいため、戦中や世界大戦の直後に撮影された写真も含めて調査を実施している。現在までに米国では各種のアーカイブなど約100機関に日本と関連する写真が保存されていることが判明した。より少数のコレクションや個人所蔵の写真などを含めればさらに多くの機関で保存されていることが想定されるが、本プロジェクトでは一般に公開されており、かつ一定量の写真を収蔵しているコレクションを優先することとしている。そしてこれまで確認されている機関に収蔵されている写真のアイテムや、コレクションの概要を編纂した電子目録を策定し、国立国会図書館デジタルコレクションなどを通して広く公開することを予定している。

写真を含めた視覚資料については、文化人類学や民俗学などの幅広い分野における活用が進んできたが、人文科学の中でも最も視覚資料と距離のあった歴史学の分野でも英国の歴史家 Peter Burke が指摘したように、その視覚資料を活用した研究例は徐々に広がってきている (Burke, 2001)。また集合的な記憶など、社会的な記憶を扱う研究分野においても、過去を想起させる媒体として積極的に捉えている。例えばドイツの代表的な記憶分野の研究者である Aleida Assmann は「写真は言語を越えた体験や経験など、身体に遺る記憶を再び想起させるのに適切な媒体になる」と指摘をしている (Assmann, 2006)。

こうした諸領域における活用が進む写真資料であるが、本調査で確認された在外日本古写真資料を概観すると、写真資料が戦前期の多様な国際交流の様相を知る手がかりになることがわかる。その理由としては、外国に遺る多くの日本関係の写真は戦前期に外国人が日本を訪れて撮影した(された)写真や、逆に日本人が外国を訪問して撮影した(された)写真が多くを占めているからである。そのためこれらの写真は撮影された背景にある日本と外国との多様な交流を想起する契機にもなる。そしてお互いが往来して撮影した写真以外にも日本人から外国の人々へ贈呈した写真の他、既に日本と関係のあった機関や個人が調査や個人的な興味のために収集した日本関連の古写真が海外にも多く遺されている。そのためこうした海外に保存されている視覚資料は日本と海外との多様な国際交流を探っていく「切り口」を提供してくれる資料となるのである。

このように各種資料から様々な関係者の交流やネットワークを探る研究は、歴史学研究分野においては書簡の往来から人々のコミュニケーションの状況を明らかにする研究などが実践されてきた。例えば日本近代史の分野においては佐々木隆による「明治時代の政治的コミュニケー

ション」などの研究を嚆矢として複数の先行研究がある（佐々木，1985）。一方で写真資料を用いた人々の交流を探る研究事例は犬塚明や石黒敬章によって明治期の高官であった森有礼（1847-1889）の旧蔵アルバムに収められた写真から，森と海外要人や日本人との関係を探る研究などがなされているが，今後より広い範囲の写真を対象として人々の交流を分析する研究の発展が期待される。

これらの観点から在外日本古写真資料にあらわれる国際交流や異文化理解を考察するにあたっては，それぞれの交流がどのような「活動」から生じたものであるかといった観点からジャンル分けを行った。その結果主に次の8つのカテゴリーに分類された。それらは「①外交活動」，「②実業・財界活動」，「③研究・教育活動」，「④文化・芸術活動」，「⑤災害記録及び支援活動」，「⑥布教・伝道活動」，「⑦移住・開拓活動」，「⑧その他」である。

前述した分類の中で①は最も基本的な政府間の外交に関する事柄であるが，②は戦前期の実業や財界に関する活動で主に国際的な取引のある企業経営者らの活動に関する事柄である。また③は大学や研究機関における研究活動や学生の留学などを通じた交流であり，④は芸術家や作家，スポーツ選手たちなどによる文化・芸術活動である。そして⑤は関東大震災などの地震や台風などにおける災害の様子を写真で撮影する記録活動や，被災者などを救援する支援活動であり，⑥は各種宣教団による日本での布教活動や日本の仏教者による米国での伝道など，宗教関係者による活動である。さらに⑦は日本人の米国や外地への移住や開拓の活動を指し，⑧はその他の個人の旅行における各種の交流などである。

これらはいくまでも目安であり，複数に適用する例も多く見受けられるが，様々な過去の国際交流や異文化接触を想起させるどのような写真が保存されているかについて，紙幅の関係から主に，①，②，③，⑤，⑥，⑦の6点からジャンルごとに紹介し，写真資料を用いた対外交流研究の可能性について考察する。

2-1. 「①外交活動」と写真資料

本項は①にあげた政府間交流，所謂外交活動に関する写真である。これらの写真は主に Library of Congress や過去の大統領経験者が設立して National Archives and Records Administration (NARA) が管理する複数の Presidential Library and Museum に保存されている。例えば日米の外交交流の最初期の事例ともいえる1960年の万延元年遣米使節の写真は米国ワシントン D.C. にある Library of Congress に保存されている。同使節は江戸幕府が日米修好通商条約の批准書交換のために派遣した使節団で，正使，副使の村垣範正（1813-1880），新見正興（1822-1869）の他，中浜万次郎（ジョン万次郎，1827-1898）や福沢諭吉（1835-1901）などが乗船していたことで知られる。同使節の滞米中の様子は主にイラストなどで知られているが，ニューヨーク訪問の様子を遠方から撮影した写真などが保存されている。

この使節団の来訪から8年後に江戸幕府は終焉を迎え，明治政府による新体制によって，日本の近代化が本格的に開始されることとなった。その後日本は極めて速い速度で殖産興業と富

国強兵策を進め、憲法制定や日清戦争などを経た1904（明治37）年には朝鮮半島を巡る利害で大国ロシアと対立して開戦に至った。旅順、奉天、日本海海戦などで勝利を得た日本であったが、ロシア軍を完全に撃退するまでは至らず、米国の仲介でロシアと和平交渉の席に着いた。そして米国大統領の Theodore Roosevelt（1858-1919）の仲介によってポーツマス条約が締結されたことによって日本はアジアにおいて一定の権益を確保するとともに、米国側もアジア地域における影響力を保つことに成功した。このポーツマスにおける和平調停の過程を撮影した写真も Library of Congress に多数保存されている。写真には、日本側とロシア側双方の代表団とともに、調停の取材を行った日米仏独英など各国の記者団などの集合写真もあり、米国側が、両者の交渉過程を写真で克明に記録していたことがわかる。また米国は条約締結後も間髪入れずに周辺各国に特使を派遣し、日露戦争後のアジアの秩序の安定と自国の影響力の保持を図ったが、その特使となったのが大統領の長女の Alice Roosevelt（1884-1980）と米国の陸軍長官で、後の大統領となる William Howard Taft（1857-1930）であった。この時の日本訪問に関する写真が、Smithsonian Institution の Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery Archives¹⁾ に収められている。Alice Roosevelt はポーツマスにて日露講和条約が締結された1905（明治38）年の10月に Taft らとともに、日本・ハワイ・中国・フィリピン・韓国などを訪問し、アジア地域における米国の存在感を高める役割を果たした。また日本側としても、ロシアとの停戦の役割を担った米国と関係を築くことは朝鮮半島における日本の影響力の拡大のためにも必要であり、使節団の来日は極めて重要な意味を持っていた。そのため Alice らの使節を盛大に奉迎し、様々な歓待を行ったが、当時の模様を写した写真には使節団の横浜の到着や新橋停車場での歓待、小学校での日本側の歓迎行事や使節による東京見学、芝離宮での園遊会や相撲見学に加え、京都での御所見学の様子が事細かに記録されている。同コレクションには日本の天皇・皇后の他、清国の西太后、大韓帝国皇帝の高宗らから贈呈された肖像写真なども保管されており、これらの写真からは単に日本だけではなく、アジア各国と調整をはかろうとした米国の抜かりない外交活動ぶりが伺える。米国によるこうした硬軟をとりまぜた外交施策の様子を写した写真によって、ロシアの周辺国で起きる様々な権益争いに複数の国が関心を寄せ、多国間で調整がなされている様子を視覚的に理解することができる。近年ではこれらの資料は、詳しい説明をつけて Google Art and Culture でも閲覧することができるようになっている²⁾。

またこうした日米関係が良好であった時期だけではなく、その後の太平洋戦争に向かう過程で、日米が外交上どのような交流をもっていたかを視覚的に辿ることができる資料も多数遺されている。例えば Harry S. Truman Presidential Library and Museum³⁾ と Library of Congress⁴⁾ に

1) Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery Archives:

<https://asia.si.edu/> (Accessed: 22-04-01)

2) Google Art and Culture:

<https://artsandculture.google.com/story/KAWBwuvgyQ8A8A?hl=ja> (Accessed: 22-04-01)

3) Harry S. Truman Presidential Library and Museum: <https://www.trumanlibrary.gov/> (Accessed: 22-04-01)

4) Library of Congress: <https://www.loc.gov/> (Accessed: 22-04-01)

は、満州事変が起きる契機となる柳条湖事件が発生した年に米国を訪問した高松宮宣仁親王(1905-1987)夫妻が、全米各地を訪問して歓迎を受ける様子や、ワシントン DC にある日本から贈られて桜を訪問する写真の他、駐米大使のホワイトハウス訪問や大使館での活動、日本の特使の国際会議への出席の様子など、日々の外交活動の様子を写した写真が収蔵されている。また、カンザス州にある Eisenhower Presidential Library and Museum⁵⁾ には第二次大戦中の連合国遠征軍最高司令官で後に米国大統領となる Dwight D. Eisenhower (1890-1969) に関する資料を保管しているが、その中にある Eisenhower の側近であった軍人 Thomas Larkin (1910-1967) に関するコレクション⁶⁾ が含まれている。それらの中には1930年代に米国の要人が東京を訪問した時と思われる駐日米国大使館における宴席や大使館の庭で写した集合写真が遺されており、戦前の大使館における外交活動の様子を伺い知ることができる。この様子からは、太平洋戦争の開戦に至るまでの日米関係の過程が決して単純ではなく、最後まで両者において様々な外交活動がなされていたことがわかり、戦争へ向かう過程における両国の関係を捉えることができる。このように①のジャンルに含まれる写真資料は、主に政府関係の施設に保管されており、それらからは文書資料ではわからない視覚効果を狙った大仰な外交儀礼の様子や、在外公館における社交の様子、ジャーナリズムを用いたメディア戦略などの様子を捉えることができる。こうした資料は、政府による視覚的な宣伝戦略の意図に注意をする必要があるが、それらを留意しながらも外交の表舞台や人々の交流の様子を具に考察していくことのできる写真資料であり、当時の両国の交流の実相を考察する上では重要なヒントを与えてくれる。

2-2. 「②実業・財界活動」と写真資料

次に「②実業・財界活動」における多様な交流を示す写真資料について概観する。これらの資料は各企業が設けたアーカイブや各企業の創業者が設立した文化施設や創業者の出生地にある大規模図書館などに保存されている。この中で代表的な例はニューヨークの Rockefeller 家や Rockefeller Foundation の資料を保存した Rockefeller Archive Center⁷⁾ や、Kodak の創業者であった Gorge Eastman (1854-1932) に関する写真資料を収集した Gorge Eastman Museum⁸⁾、さらに、自動車会社の Ford Motor の創業者に関する資料を集めた Henry Ford Museum⁹⁾ など多数の機関をあげることができる。

その中の一例としてあげられる資料がワシントン州のメアリーヒルにある Maryhill Museum of Art¹⁰⁾ に収蔵されている写真群である。同館は弁護士であり、また米国の鉄道会社やガス会

5) Eisenhower Presidential Library and Museum: <https://www.eisenhowerlibrary.gov/> (Accessed: 22-04-01)

6) Thomas Larkin Collection: <https://www.eisenhowerlibrary.gov/sites/default/files/finding-aids/pdf/larkin-thomas-papers.pdf> (Accessed: 22-04-01)

7) Rockefeller Archive Center: <https://rockarch.org/> (Accessed: 22-04-01)

8) Gorge Eastman Museum: <https://www.eastman.org/> (Accessed: 22-04-01)

9) Henry Ford Museum: <https://www.thehenryford.org/visit/henry-ford-museum/> (Accessed: 22-04-01)

10) Maryhill Museum of Art: <https://www.maryhillmuseum.org/> (Accessed: 22-04-01)

社の経営者として知られた Samuel Hill (1857-1931) の館を改造した美術館である。Samuel Hill は鉄道王として知られた James Jerome Hill (1838-1916) の長女と結婚し、Great Northern Railway の幹部となった他、シアトルでガス会社なども経営する実業家であった (Tuhy, 1983)。また Hill は鉄道だけではなく米国とカナダの太平洋側を結ぶ道路整備を進めるとともに、国境の結節点に両国の平和友好を願って公園と「平和アーチ」を建設する公共事業などにも尽力し「道路王」とも呼ばれていた。そして鉄道会社の Great Northern Railway は、日本の船会社である日本郵船と提携し、シアトルから横浜への定期航路を設けており、日本郵船社長の近藤廉平 (1848-1921) ら日本の実業界とも関係が深く、Hill 自身が日本を複数回訪問している。そのため Hill と関係する写真を保存している Maryhill Museum of Art には、Hill の来日時の写真が複数保存されているが、その中に Hill が1922 (大正11) 年頃に来日した時の写真が収められている。

この時の Hill の訪日の目的の1つは同時期に来日する、第一次世界大戦のフランスの英雄であった Joseph Joffre (1852-1931) 元帥と会い、自らが進める道路の開通と平和アーチの完成記念式典に招請することであった。同コレクションの中には、Hill が招請に成功し、Joffre と平和を象徴する鶴の像を挟んで写る写真が遺されている。また Hill は日本の政財界人と頻繁に交流するとともに、日本における近代的な道路整備に関して助言や援助を行っていた。Hill が1920 (大正9) 年に訪日し、帝国ホテルで日本人の記者団と懇談した際にも日本の道路は欧米と比較して状態が悪く、これらを改善することが必要であると述べている¹¹⁾。日本の政財界人にもこうした助言を頻繁に行っていたとみられ、Hill は東京市長などを歴任した後藤新平 (1857-1929) と様々な社会貢献事業にも携わっていた実業家の渋沢栄一 (1840-1931) と会談し、2人にスコップを渡す写真を撮影している。恐らくこのパフォーマンスを含む写真は Hill などの米国企業が協力して東京を中心とした道路改善をサポートするといったことを内外に示す目的があったものと考えられる。実際1923 (大正12) 年に関東大震災が発災すると、後藤新平は内務大臣兼帝都復興院総裁として震災復興計画を立案し、その中で江戸の名残を残す狭い道路を拡幅するとともに、環状線と南北を結ぶ道路などを設計し、東京の道路状況を改善した。また渋沢も帝都復興審議会の委員として後藤らの計画を後押ししている。そのためこの写真は、日本における近代的な道路整備における日米協力の構図を端的に示す写真となっている。それ以外にも同写真コレクションには Hill が日本の道路工事に立ち会う様子や、政財界人を思われる人々と歓談する様子、墓参や芸妓と宴席を共にする様子などが写されており、日本の政財界と深いつながりがあった様子が伺える。

また、ニューヨークの Gorge Eastman Museum には1920 (大正9) 年に日本を訪問した Kodak 創業者 Gorge Eastman が日本滞在時に撮影した写真が遺されている。Eastman は National City Bank of New York (現在の Citi Bank) の頭取だった Frank A. Vanderlip (1864-1937) を団

11) 1920年5月6日 朝日新聞 7頁

長とする米国の財界訪日団の一行に加わって来日し、一団には、弁護士で前大統領 Taft の弟であった Henry Waters Taft (1859-1945) や、元財務長官で First National Bank of Chicago の頭取も務めた Lyman Judson Gage (1836-1927)、Cornell University 総長の Jacob Gould Schurman (1854-1942) らが参加していた。一方の日本側は渋沢栄一、近藤廉平、大倉喜八郎 (1837-1928)、三井高棟 (1857-1948)、古河虎之助 (1887-1940)、浅野良三 (1889-1965) らの財界人が対応し、使節団はそうした日本の財界人の邸宅に宿泊した。この一団に参加した Gorge Eastman は、1880年よりガラス乾板とそれを用いた写真撮影機器の開発を皮切りに、軽いロール式フィルムも開発して、一般の人でも屋外で気軽に撮影ができるカメラの販売で成功していた (Pflueger, 2002)。来日した Eastman は日本の新聞においても、フィルムは引き伸ばし自由で重量も軽い長所を指摘し、現在米国各地に写真学校を開設するとともに、フィルムの改良にも努め、暴風雨・闇夜・逆光・空中・海底からでも自由に撮影できると述べている。また最後に「私は写真機を連れに一行に加わってきたのですから、到る處で美しい日本の風光や珍しい美術工芸品を皆此カメラに撮って了ふつもりです」と語り携帯用の写真機を取り出したと記事は結んでいる¹²⁾。

この時に日本で撮影された写真のフィルムが Gorge Eastman Museum に保存されているが、そこには、宿泊先となったと思われる三井家綱町別邸 (現在の綱町三井倶楽部) の建物の他、旅行先の京都の社寺や岡崎の公会堂、農村、駅などが写っている。ただ、日本の財界人や宴会などの写真は含まれておらず、むしろカメラは日本の市井の人々に向けられ、ある写真では駅頭で子を背負い、子守りをする少年やそれを笑顔で囲む人々、人力車の車夫が駅前で客を待つ様子や客を運ぶ様子など、むしろ市民の生活にレンズを向けているところが興味深い。これらの写真からは米国訪問団も各地を訪れ、一般市民と触れ合う機会があったことが伺える。また人力車の動くところなど、動きの激しい場面では写真の焦点がずれている所が見られるが、当時のカメラの性能なども確かめられる写真資料ともなっている。

こうした米国の財界人や企業活動の様子を写した写真は他のアーカイブでも確認することができ、Henry Ford Museum には1926年の横浜の Ford 工場やその販売店での営業活動の様子、さらに1908年にニューヨークからパリに向けて行われた世界横断自動車レースで、Ford の車が日本の農村を駆け抜ける様子が写されている。また、Rockefeller Archive Center には、1920年代の John D. Rockefeller Jr. 夫妻による日本訪問の写真、その次男でニューヨーク州知事及び米国副大統領を務めた Nelson Aldrich Rockefeller (1908-1979) の1930年代の日本訪問の様子を写した写真、さらに別途収集したと思われる日本の京都や奈良、日光を撮影した幻燈のスライドなどが遺されている。Rockefeller 家は親日家とも知られており、昭和天皇 (1901-1989) の戦後の訪米の際には副大統領であった Nelson と兄の John D. Rockefeller III (1906-1978) の邸宅を訪問している。

12) 1920年4月25日 讀賣新聞 9頁

またこれ以外にも日米財界の交流を示す写真資料が数多く保存されており、戦前より両国の実業界、企業人界では活発な交流があったことが伺える。特に商用上の交流だけではなく、文化交流や学術支援など、より企業人の中で多様な接触機会があったことが確認できる。特に後述する Rockefeller 家の運営する Rockefeller Foundation は日本の大学や研究機関に多くの支援を行い、日本の学術研究の進展に貢献しており、企業家による国際交流は社会・文化の両面に大きな影響を及ぼしている。しかし、これらの実業界における交流は第二次世界大戦に勃発により、一時的に大きな亀裂と断絶を生じさせることになる。しかし戦後の復興や産業の再生においては、戦前期の実業界における人脈が生かされ、それが日本の経済・産業の復興につながるようになった。日本と外国との交流が増加する現代においても、政府間の外交に埋もれがちなこうした民間による人的交流史の再評価が必要であろう。そのためには、文字資料だけではなく、実際に両者が交流をしている様子や、お互いがどのような点にまなざしを向けたかわかる写真資料なども活用し、異文化理解の記憶を共有していくことが重要である。その意味では海外に眠る企業などを中心とした民間交流を写した写真資料により光をあてていくことが必要であろう。

2-3. 「③研究・教育活動」と写真資料

次に「③研究・教育活動」に関する写真資料の保存状況について概観していく。これらの写真は主に全米の大学図書館や博物館の他、Smithsonian Institute¹³⁾などの規模の大きい施設に保存されている傾向がある。また外国人が写真資料を用いて研究する日本と関連する研究テーマの中で代表的な分野としてあげられるのが「アイヌ」に関する研究である。アイヌに関しては戦前から戦後に至るまで、生物学、文化人類学、民族学、言語学などの分野で外国人研究者から関心を持たれ、来日した外国人による各種調査と、複数の研究者との活発な交流が行われた。外国人によるアイヌ研究については古くは江戸時代に、ドイツ人の Philipp von Siebold (1796-1866) がその著書にとりあげ、幕末には同じくドイツ人の Max von Brandt (1835-1920) によってアイヌに関する調査が行われている。そして明治期に入ると、海外からの旅行者や所謂「お雇い外国人」と呼ばれた外国人教師や宣教師などが調査を実施しているが、その中には米国の高名な詩人 Henry Longfellow (1807-1882) の子息で明治初期に日本を周遊した Charles Appleton Longfellow (1844-1893) や日本の地震学の祖である英国人の John Milne (1850-1913)、大森貝塚を発見した米国人の Edward Sylvester Morse (1838-1925) などが含まれ、様々な資料が遺されている(岸上 佐々木, 2011)。

その一方で、近世以降に実施されたアイヌを対象とした調査では、人種の恣意的な定義付けと序列化を行い、アイヌ居住地域の植民化を目的とした調査もあったことは様々な観点から指摘されている(植木, 2015)。そのため、戦前のアイヌ研究に関する研究内容やその資料もそ

13) Smithsonian Institute: <https://www.si.edu/> (Accessed: 22-04-01)

うした観点からの再評価が必要であろう。このような背景を持つアイヌ関係資料ではあるが、米国における所在状況については既に小谷らによって明らかにされており（小谷，1993），改めてその中でも写真資料に着目して主なコレクションについて概説する。

まず前述した Charles Longfellow が蝦夷地を訪れて撮影した写真はボストンの Longfellow House (Washington's Headquarters National Historic Site)¹⁴⁾ に保存されており，その写真の一部は日記とともに編纂された書籍で確認することができる（Longfellow, 1998）．一方で後年に，より学術的な観点からも調査が実施されたが，そうした写真資料で米国に遺されている例としては Smithsonian Institute に保存されている Romyn Hitchcock (1851-1923) と J. F. McClendon (1880-1976) の写真資料をあげることができる．

Hitchcock は Smithsonian Institute のキュレーターとして勤めた後の1887（明治20）年に大阪の第三高等中学校に英語教師として赴任し，関西では写真を用いた古墳の調査などを先導したことでも知られている（上田，2006）．そして，1888（明治21）年には日本の日食を調査する調査団の写真担当となり，同年8月に根室・別海・色丹・択捉などを含む北海道東部におけるアイヌの調査を実施し，多くの写真資料と遺している．Hitchcock によるこれらの調査の概要やその写真の内容は宇仁による論考が詳しいが，それらの写真にはアイヌの居住地の様子や生活，着用している衣装や所有する楽器や船など，アイヌの生活がわかるような様子が写っている（宇仁，2015）．写真の様子からは Hitchcock がかなり住民の生活に接近し，アイヌの身体や衣装までを細かく記録に遺していることがわかるが，これらの写真コレクションは「Romyn Hitchcock photographs of Ainu people, Japan, and Korea, circa 1885-1895」として保存されている¹⁵⁾．岸上らによれば Hitchcock の業績はこれらの写真資料にも基づいて東部と南西部のアイヌ文化の違いを示し，アイヌ文化の多様性を指摘したことにある．また Hitchcock の写真資料にはアイヌだけではなく，他のアジア地域などを写した写真もあり，この当時の東アジアの様子がわかる貴重な資料群とも言えよう．Hitchcock の調査は写真を記録手段として有効に活用することで，より詳細な分析を可能にしており，その成果は，1891年の Smithsonian の年次報告書などにまとめられている（Hitchcock, 1891）．

また，同じ Smithsonian 内に保存されている「J. F. McClendon photographs and postcard collection of Ainu people¹⁶⁾」には，生物学者であり，人の胃における PH 値の測定を世界で初めて実施した J. F. McClendon (1880-1976) が1930年代に撮影したアイヌ関連の写真が保存されている．McClendon は1880年にアラバマ州ラネット出身で，University of Texas と University of Pennsylvania で動物学を学んだ後に，University of Missouri や Cornell University で教鞭をとり，

14) Longfellow House: <https://www.nps.gov/long/index.htm> (Accessed: 22-04-01)

15) Romyn Hitchcock photographs of Ainu people, Japan, and Korea, circa 1885-1895: <https://sova.si.edu/record/NAA.PhotoLot.77-38> (Accessed: 22-04-01)

16) J. F. McClendon photographs and postcard collection of Ainu people: <https://sova.si.edu/record/NAA.PhotoLot.102> (Accessed: 22-04-01)

さらに Physiological Laboratory of the University of Minnesota Medical School に移籍した後の1932年4月から33年3月にかけて、Rockefeller Foundation¹⁷⁾ の支援によって東北帝国大学の生物学研究所に派遣され、その時に、日本のアイヌについての写真を用いた調査を実施した(米澤, 2018)。これらの写真にはアイヌの人々の儀式、宗教や習慣、狩猟、漁猟などの活動が写されているが、これは McClendon がネイティブアメリカンとアイヌが生物学的に直接的な関係がないことを示すために用いた資料とみられる。そしてコレクションの中には McClendon が撮影した写真を元に作成したと思われるアイヌに関する絵葉書が含まれている。

またそれ以外にもアイヌに関する資料は米国の複数の機関に保存されており、Harvard University の Peabody Museum¹⁸⁾ には1885から1913年頃のアイヌの集落や住民などを写した写真が収蔵されている。またニューヨーク州の American Museum of Natural History¹⁹⁾ には1901年頃にアイヌを撮影したガラス原板を多数保存している他、UCR California Museum of Photography の Keystone-Mast Collection²⁰⁾ には、1904年頃に撮影したアイヌの写真が保管されている。また J. Paul Getty Museum²¹⁾ でも、1908年頃に撮影したアイヌの夫婦の写真や Oakland Museum of California²²⁾ や Denver Museum of Nature & Science²³⁾ の Charles A. Mantz Collection 内においては、1930年代に撮影したアイヌ関連の写真コレクションが遺されている。このように、アイヌに関する資料だけでも複数の機関に渡って保存されており、こうした資料については、前述した先住民の捉え方に十分留意をしながらも、現在では失われてしまった様々な地域の生活を検証していく上で重要な資料として活用していくことが肝要であろう。

また前述した McClendon の渡日については Rockefeller Foundation の支援があったことを述べたが、Rockefeller Foundation の運営自体に関する資料は前述の Rockefeller Archive Center に収蔵されており、同 Foundation が支援を行うにあたって実施した調査の記録の中に、日本の研究機関に関する写真が含まれている。それらの写真は、より全体的なカテゴリーに加えて各学術分野ごとのカテゴリーによって構成されているが、前者には前述した McClendon が所属した東北大学の生物研究所や北海道帝国大学、九州帝国大学に加えて、関西大学や慶應義塾大学などの私立大学の写真も含まれている。またカテゴリー別では医学、看護、自然科学および農学、公衆衛生、人文科学および芸術、社会科学、ウイルス学などのカテゴリーに分かれており、医学分野であれば東京帝国大学、看護分野ではあれば聖路加国際大学、自然科学および農学であれば北海道大学、人文学および芸術であれば、国学院大学や花園大学、ウイルス研究で

17) Rockefeller Foundation: <https://www.rockefellerfoundation.org/> (Accessed: 22-04-01)

18) Harvard University Peabody Museum: <https://peabody.harvard.edu/> (Accessed: 22-04-01)

19) American Museum of Natural History: <https://www.amnh.org/> (Accessed: 22-04-01)

20) UCR California Museum of Photography の Keystone-Mast Collection
<http://ucr.emuseum.com/collectionoverview/3631> (Accessed: 22-04-01)

21) J. Paul Getty Museum: <https://www.getty.edu/museum> (Accessed: 22-04-01)

22) Oakland Museum of California: <https://museumca.org> (Accessed: 22-04-01)

23) Denver Museum of Nature & Science: <https://www.dmns.org/> (Accessed: 22-04-01)

あれば京都大学といったように、各カテゴリーに適應する複数の大学に関する写真資料が保存されている。これらは、国境を越えて日本の学術研究を支援してきた同財団と日本の大学・研究機関とのつながりがわかる内容となっている。

さらに、研究機関では研究者に関する交流だけではなく、学生間による交流も重要であるが、米国ニュージャージー州にある Rutgers University Libraries²⁴⁾ 内の The William E. Griffis Collection²⁵⁾ には、幕末から明治にかけて Rutgers University や日本の学校で教鞭に立った Griffis とその生徒との交流やつながりを示す写真資料が多数遺されている。

同大学は、1766年にオランダ改革派教会の人々によって設立された学校であるが、William E. Griffis (1843-1928) は本大学の卒業生であり、同大学において福井藩からの留学に来ていた日下部太郎 (1845-1870) の依頼で渡日し、福井藩の藩校明新館で教鞭をとることとなる。その後、廃藩置県によって福井藩が廃止された後は、東京の大学南校で教鞭をとった後に米国に帰国して、牧師となるが、日本に関する書籍 “The Mikado’s Empire” などを著し、また日本に関する講演なども行っている。

そして、大学南校で同僚であった Guido Herman Fridolin Verbeck (1830-1898) も幕末にオランダ改革派教会の宣教師として来日し、佐賀藩の藩校や明治以降は開成学校などで教鞭をとっていた。そのため、多くの日本人の教え子を留学先として Rutgers University に推薦した結果同大学に多くの日本人が留学し、その中には後に明治政府の中心で活躍する人材も多数含まれていた。そのため明治政府の中でも Griffis と Verbeck を中心とした Rutgers University と関係する人脈が形成されており、Griffis のコレクションの中にはそうした Rutgers 関係者のネットワークを示す写真が多数含まれている。

具体的な写真としては皇族の有栖川宮熾仁親王 (1835-1895)、同威仁親王 (1862-1913)、伏見宮貞愛親王 (1858-1923)、小松宮彰仁親王 (1846-1903) や伊藤博文 (1841-1909)、山縣有朋 (1838-1922)、桂太郎 (1848-1913) などの多数の元老、元勳の写真に加え、「Japanese Students at Rutgers University」と名付けられた複数の保存箱には前述した福井出身の留学生であった日下部太郎や横井小楠 (1809-1869) の甥の横井佐平太・大平 (1850-1871) 兄弟の写真も含まれている。また「W. E. Griffis and “My Fukui Boys”」と名付けられた写真には福井関係の留学生などが写っている他、福井関係以外にも Rutgers University に留学した岩倉具視の子息であった岩倉具定 (1852-1910) や、松方コレクションでも有名な松方幸次郎 (1866-1950) など、多数の留学関係者の写真も含まれている。これらの写真と文書資料などをあわせることによって、Griffis や Rutgers 関係者のネットワークも探ることができる内容となっており、今後こうした写真資料を用いた留学生ネットワークの分析にもつなげることのできる資料である。

24) Rutgers University Libraries: <https://www.libraries.rutgers.edu/> (Accessed: 22-04-01)

25) The William E. Griffis Collection:

<https://www.libraries.rutgers.edu/new-brunswick/visit-study/locations/special-collections-university-archives/divisions-collections/manuscripts/william-elliott-griffis-collection> (Accessed: 22-04-01)

一方で、日本と海外の研究者同士の交流を示す写真資料も保存されている。米国の Leo Baeck Institute には物理学者の Albert Einstein (1879-1955) に関する資料が保存されているが、その中には1922 (大正11) 年に Einstein が改造社社長の山本実彦 (1885-1952) の招聘と受けて訪日した時の写真資料が保存されている。写真には、Einstein が日本の研究者と交流したり、学生の前で講演をしたり、芸妓との宴席に出席したり、京都の社寺を訪ねる様子などが写された写真が多数遺されている²⁶⁾。

また、Einstein は来日中全国で8回の講演を実施したが、その講演を聞いた湯川秀樹 (1907-1981) が物理学の道に進むことになったことはよく知られている。両者は湯川が戦後に米国に招かれたときに再会しているが、湯川がノーベル物理学賞を受賞した後の1953年6月に改めて Princeton University で面会をしており、その時の2人で並ぶ写真が Johns Hopkins University の The Sheridan Libraries²⁷⁾ に保管されている。

また湯川と同じ日本の物理学者として知られ、宇宙線や加速器関係の研究で業績をあげて、クライン・仁科公式を発案したことで知られる仁科芳雄 (1890-1951) に関する写真資料が North Carolina State University Libraries・Special Collections Research Center の Harry Charles Kelly Papers²⁸⁾ に保管されている。本コレクション名になっている Harry Charles Kelly (1908-1976) は、第二次世界大戦後の日本の科学界の再興に貢献したことで知られている。

日本の科学界は戦時中の軍部との関係により、大戦後は米軍を中心とした連合国軍によって研究環境や組織を解体させられる可能性が極めて高く、実際に進駐直後には仁科らが原爆研究などに用いた理化学研究所のサイクロトロンがGHQによって東京湾に投棄処分されている。しかし、米国科学アカデミーが日本の研究機関への行き過ぎた破壊は世界の科学の発展にも悪影響を及ぼすと考えたため、GHQは日本の科学技術研究体制を単に解体するのではなく、新しい民主主義体制に適應させる形で改革を進めた。そして、その青写真を策定する人物として物理学者の Kelly が経済科学局科学技術部基礎研究主任に任命され、さらにその後も科学技術部次長、次いで部長となり最高司令官 Douglas MacArthur (1880-1964) の科学顧問を務めることとなった。その過程で日本学術会議の創設に尽力するとともに、理化学研究所の刷新にも貢献し、1950年には米国からラジオ・アイソトープの輸入を実現させた。Kelly は同年に帰国をするが、1951から62年にかけて全米科学財団副理事長を務め、さらに North Carolina State University の副学長を歴任し1961年には日米科学委員会第1回会議共同議長を務めた後、1976年に死去した (吉川, 1987)。Kelly の死後、副学長を務めた North Carolina State University Libraries には、Kelly に関係する文書が寄贈され、その中に日本の占領政策時に関わった各種文書とともに、日本と関係する写真などのアルバムなどが含まれており、その中に仁科芳雄に関する写真が複数含まれている。恐らくこれらは仁科との交友関係の中で生前に本人から

26) Leo Baeck Institute: <https://www.lbi.org/collections/> (Accessed: 22-04-01)

27) Johns Hopkins University The Sheridan Libraries: <https://www.library.jhu.edu/> (Accessed: 22-04-01)

28) Harry Charles Kelly Papers: <https://www.lib.ncsu.edu/findingsaids/mc00072/> (Accessed: 22-04-01)

Kelly に贈呈されたものである可能性が高い。写真の中には仁科の学生時代の写真など、仁科の生涯をたどることができる写真となっている。これらの写真資料は、戦後における日本の科学界の復興を下支えした日米科学者間の交友関係を示す資料ともいえよう。

このように、本項では、学術研究、研究機関および研究支援機関、留学生、研究者と4点に関わる在米の日本古写真資料を概括したが、海外の研究者が研究対象の中に入り撮影した資料からは、研究者が写真という機器を媒体として積極的に異文化の中に入り込んでいった様子が伺える。また、教え子の写真や彼等との集合写真、さらに皇族や政府高官と交わした名刺版などで構成される Griffis のコレクションからは、明治政府に雇用された外国人教員がいかに政府の指導層に近い人々と多様かつ幅広い人的ネットワークを形成していたかがわかる。また Leo Baeck Institute の資料からは、戦前における Einstein と日本の研究者や学生、市民との触れ合いの様子を把握できるとともに、そうした交流が湯川秀樹などの新しい世代のノーベル賞受賞者を生み出すこととなる「つながり」を想起させる資料となっている。

また、Kelly Papers にある Kelly と仁科に関する写真資料は、深刻な戦争によって一時的に分断された敵国同士でも、世界的な科学の進歩を考え、戦後は再び研究者同士が絆を深めていく様子が分かる資料となっている。どの時代も研究や教育は、時代の要請に基づいて展開される側面があり、帝国期に関わらず、過去の研究や教育、研究者相互の関係が社会を望ましくない方向に向かわせることが多々ある。しかし、その場合もそれらを事後検証できる資料を遺すことで、後世において再評価をして、将来の教訓としていくことが必要であろう。

2-4. 「⑤災害記録及び支援活動」と写真資料

続いては災害や支援活動に関する写真資料を概観する。日本が地震の多発地帯にある事は、海外でもよく知られているが、在米の日本関係資料にも地震を中心とした災害やその支援に関係する記録資料が多数含まれている。これらの災害に関する写真資料は Library of Congress や各地の主要な大学の図書館などに多く保存されている。

戦前に発生した地震の中で特に写真の題材として多いのが1891（明治24）年に発生した濃尾地震と1923（大正12）年に発生した関東大震災である。前者の写真については英国人の W. K. Burton（1856-1899）とアイヌ研究の項目で述べた John Milne や日本の写真師の小川一眞（1860-1929）らによって撮影・編集された写真帖『The great earthquake in Japan, 1891』がよく知られているが、University of Colorado Libraries²⁹⁾ では同書の全頁をデジタル化して、ページめくり機能で閲覧することができるコンテンツが公開されている³⁰⁾。また同館には、19世紀後半に世界を周遊し、その間に撮影・収集した7000余の写真で構成される Ira Wolff Collection を所蔵しており、その中のアルバムなどにも、地震の様子を写した写真が収蔵されているが、そ

29) University of Colorado Libraries: <https://www.colorado.edu/libraries/> (Accessed: 22-04-01)

30) The great earthquake in Japan, 1891: <https://cudl.colorado.edu/luna/servlet/detail/UCBOULDERCB1~73~73~1101696~264681>: (Accessed: 22-04-01)

こには地震直後の倒壊した家屋などの様子を写した写真が多数含まれている。また、多くの報道写真の権利を保有し、販売している Getty Images³¹⁾ においても Hulton Archive³²⁾ が所蔵する彩色がされた濃尾写真の被害の様子を撮影した写真を公開している。また、同サイトには、John Milne (1850-1913) が撮影されたとされる、津波の被害の様子を写した写真も公開されているが、それらの写真には津波の被害で水死した被災者の様子を写した写真が多数含まれている。当時は内陸で発生した地震の被害の様子を伝えた写真は多くあるが、沿岸部で発生した津波の被害の様子を写した写真は比較的数量が少ないため、明治期の津波の被害を検証する上でも重要な手がかりを提供する写真である。

これらの写真の撮影に関わったと考えられる Milne は英国の King's College London を卒業後、王立鉱山学校で学んだ鉱山技師であったため、1876 (明治9) 年に工部省の招きで来日したが、東京に到着した日に地震に遭遇したことが契機となり地震学の研究を開拓する。そして三原山や阿蘇山など各地の火山調査や濃尾大地震の現地調査などを行い、1880 (明治13) 年には Milne の提唱によって日本地震学会が発足した。この間に工学寮 (東京大学工学部の前身) で採鉱学や冶金学を教え、同校が東京大学となった後も同大に奉職し、滞日中に開拓使女学校出身の堀川トネと結婚し、1895 (明治28) 年6月に英国に帰国している (Herbert-Gustar, 1980)。Milne によって、日本のみならず世界の地震学は急速な発展を遂げ、現在の地震研究の基礎を築くこととなったが、こうした貢献をした Milne の写真は彼自身が日本における地震に対してどのような関心を向けていたかを語る地震学史上の証言資料にもなっている。

また、これら濃尾写真よりも多くの資料を確認することができるのが関東大震災である。関東大震災の被害は、米国でも高い関心を集め、時の米国大統領 John Coolidge (1922-1933) はラジオを通じ全米に向けて日本への支援を呼びかけるとともに、大統領令を発し、日本周辺に寄港中のアジア艦隊に命じて救援物資を日本に急送させた。また、大統領自身が総裁を兼ねていた米国赤十字社に対して500万ドルを目標に募金活動を指示し、募金活動が全米各地で行われ、その様子は写真などを用いて大きく報じられ、その結果目標を上回る800万ドルの義援金が日本へ送られるなど、米国は突出した支援国となった (波多野・飯森, 1999)。

こうしたこともあり、震災直後から米国でも様々な写真が公開されており、それらの写真が現在でも米国の各機関に保存されている。ヒューストンの The Museum of Fine Arts, Houston³³⁾ には、ステレオ写真と呼ばれる、専用の機器を用いることで、立体視を実現する写真を多く収蔵しているが、その中にも関東大震災前の東京や横浜の様子がわかるステレオ写真が複数保管されている。そして震災後の様子については、Library of Congress に震災後の様子を写した通常の写真とともに、前述したステレオ写真のシリーズで、震災後の東京や横浜を撮影した写真が多数保存されている。またそれ以外も、Duke University Libraries においては、「Kantō

31) Getty Images: <https://www.gettyimages.com> (Accessed: 22-04-01)

32) Hulton Archive: <https://www.gettyimages.com/collections/hulton-archive/> (Accessed: 22-04-01)

33) The Museum of Fine Arts, Houston: <https://www.mfah.org/> (Accessed: 22-04-01)

Earthquake materials, 1923 and undated』と題されたコレクションが保存されており、この中には、東京における火災が発生した地域を示す地図や震災の概要を報じるグラフ雑誌や新聞の切り抜きを貼りつけたスクラップブックとともに、写真入りのパンフレット、カラー写真が入った18枚のポストカードに加えて白黒写真などが多数保存されている。また、後述するキリスト教の宣教団体も様々な被災者への救済活動を行ったが、同機関にも多くの震災を伝える資料が遺されており、ニューヨークの Maryknoll Mission Archives³⁴⁾ や Yale University, Divinity School, Day Missions Library³⁵⁾ などに多数遺されている。また、個人が撮影して、編纂したアルバムなども保存されており University of Wisconsin-Madison Libraries³⁶⁾ には、撮影者と思われる人物による手書きのキャプションが記入されたアルバム『関東大震災：個人による写真帖 Kantō daishinsai: kojīn ni yoru』を収蔵している。アルバムは100枚ほどで構成しているが、最初のページに「摂政殿下御巡視（上野公園）」「国母殿下臨時救護所行幸」といった、当時の摂政（後の昭和天皇）や節子皇后を間近に写した写真の他、浅草・神田・湯島・日本橋の他、警視庁や大蔵省などの官庁街や第一生命のビルより見回した市内の被害の様子に加え、鎌倉の大仏や横浜の税関などの建物の被害を写した写真が掲載されている。摂政や皇后に近づける上、短期間に広範囲の写真撮影していることから、特別な許可を得た人物の撮影と考えられる写真が掲載されている。こうした被害の写真は Harvard Library³⁷⁾ や Wisconsin Historical Society³⁸⁾ などにも多数保存されている。一方、こうした被害の写真だけではなく、再建後の様子を写した写真も収蔵されている。前述した Getty Images で公開している Corbis Historical Collection には、復興し整備された東京の写真が保存されている他、Library of Congress には、復興後の昭和5年3月26日に内務省と東京市が主催し、宮城外苑内で開催された帝都復興完成式典の様子を写した写真や、復興後に日本の市長代理が米国政府に震災への返礼をするために訪米した模様などを写した写真などが遺されている。このように全米各地に戦前期の日本の地震に関する写真が数多く保管されているが、そのことは日本の地震が国内のみならず世界の関心の的であったことを示している。また、地震そのもの以外にも、その後の復興や、災害支援の返礼に関する写真資料が遺されていることは、地震そのものだけではなく、被害への支援やまた支援を通じた国際交流の重要性を伝えている。

2-5. 「⑥布教・伝道活動」と写真資料

本項では様々な宗教団体による、布教・伝道活動の写真を取り上げる。これは米国の団体が日本で布教する場合もあれば、日本人や日本の団体が米国で布教する場合も両方のケースがあ

34) Maryknoll Mission Archives: <https://maryknollmissionarchives.org/> (Accessed: 22-04-01)

35) Yale University, Divinity School, Day Missions Library:
<https://web.library.yale.edu/divinity/day-missions-library> (Accessed: 22-04-01)

36) University of Wisconsin-Madison Libraries: <https://www.library.wisc.edu/> (Accessed: 22-04-01)

37) Harvard Library: Harvard Library <https://library.harvard.edu/> (Accessed: 22-04-01)

38) Wisconsin Historical Society: <https://www.wisconsinhistory.org/> (Accessed: 22-04-01)

る。米国内においては、各宣教団体のアーカイブや、神学部のある大学図書館においてこれらの写真資料は保存されているが、近年では University of South Carolina Libraries が、欧米の宣教団が保存している写真資料をデジタル化して International Mission Photography Archive として公開しており、ここで複数の団体の写真資料を閲覧することができる。これらの中に含まれる主要な資料として、テキサス州アビリーン市にある Abilene Christian University 付属の Brown Library³⁹⁾ に収蔵されている写真コレクションを挙げるができる。同コレクションには、戦前に米国のプロテスタント教会などが関わった日本の教会活動の様子を写した写真が保存されている。具体的な資料としては、東京小石川にあった新築間もない上富坂教会の様子を写した写真や、日本にあった司祭が住む洋館、また横浜港から帰国する司祭の家族などを写した写真などがあり、日本における米国人によるキリスト教の伝道活動がわかる内容になっている。

また前述したニューヨーク市にある Maryknoll Mission は1911年に創設されたカトリックの海外宣教会であり、同会の Maryknoll Mission Archives には戦前期の日本における同会の活動を写した写真が多数収蔵されている。同会の日本での活動は1933年に3人の宣教師が派遣されてから開始された後、1935年からは滋賀県や京都府、奈良県などの西日本での活動を開始しており、現在でも東京や北海道で活動を行っている。同会の写真アーカイブには、1930年代の活動の様子がわかる写真が保管されており、教会での米国人宣教師と日本の信徒との集合写真や、宣教とは直接関係ない富士山や彦根での川下り、東京や京都などの様子を写した写真絵葉書が含まれ、戦前の日本の風景や風俗を今に伝える写真が多数含まれている。

そしてこの中には、静岡県御殿場市にあったハンセン病者の収容施設であった神山復生病院に収容された患者の集合写真を写した絵葉書も含まれている。神山復生病院は1886（明治19）年に Missions étrangères de Paris（パリ外国宣教会）の神父 Germain Leger Testvuide（1849-1891）が日本では差別と偏見の対象となり、治療が行き届いていなかったハンセン病患者の救済のために御殿場の鮎沢村（現在の御殿場市新橋）に設立した療養施設である。その後、同施設は神山に場所を移し、日本初のハンセン病の療養施設として多くの病者が治療生活を送る場となった。一方で日本政府は1907（明治40）年に、法律第11号を成立させ、療養の方法がなく屋外で生活している所謂「放浪患者」を療養所に隔離することを定めたが、1931（昭和6）年には全ての患者を本人の意思にかかわらず「強制隔離」をできるように同法を改正した。その法律の下でハンセン病患者を隔離することを奨励する「無癩県運動」が起り、強制力を伴った官憲による連行が実施され、ハンセン病に対する差別と偏見を一層助長することになった。一部の公営の施設では医療や食事の提供も不十分な環境の下で労働を強いられたり、監禁されるなど、囚人のような扱いをうけていた他、断種手術や中絶手術が強制的に実施されていた。

そのような中で、米国で開発された新薬の開発によってハンセン病は治癒が可能な病気となったものの、1953（昭和28）年にも新たに「らい予防法」が成立し、同法が1996（平成8）

39) Abilene Christian University Brown Library: <https://www.acu.edu/library/> (Accessed: 22-04-01)

年に廃止されるまで強制隔離が継続されるなど、ハンセン病は差別と偏見の対象となった（松岡，2020）。

こうした日本におけるハンセン病の歴史の中で、本絵葉書の写真が撮影された時期は1931（昭和6）年の強制隔離が開始された前後と考えられ、集合写真に写る患者の中には顔を隠す仕草をみせる者もいるなど、厳しい差別が続いていた環境であった様子が伺える。しかし、他の隔離所と比較して、キリスト教精神に基づいて運営された同病院では、神父が歴代院長をつとめ、特に第6代院長を務めた神父の岩下壮一（1889-1940）は医療設備を充実させた（鈴木，2019）。また看護婦として勤めた井深八重（1897-1989）による患者への献身的な看護活動は国際的にも評価され、1959年には教皇 Ioannes XXIII（1881-1963）より聖十字勲章を、1961年には赤十字国際委員会よりナイチンゲール記章を受章している（輪倉，2015）。

そのため他の施設と比較すれば理解のある環境にあったものの、社会の無理解は長年にわたって放置されており、この絵葉書は、当時の患者の苦境を物語る写真資料であるといえよう。このように日本においてはハンセン病患者を非人道的に扱ってきた過去があるが、それらの待遇改善の尽力したのはこうした欧米の宣教団体やそこに属する日本人や外国人の牧師や宣教師であったことも事実であろう。本絵葉書が海外の宣教団のアーカイブに保存されていたことは、海外の布教団体が日本の過酷な現場に関心を寄せ、改善の一助になってきたことを改めて想起させる。

また、同団は戦前において中国での宣教活動を実施したことで知られているが、その拠点の一つが当時南満州鉄道（満鉄）によって租借されていた大連であった。大連には当時満鉄と関係する多くの日本人が居住していたが、満鉄内のクリスチャンを中心とした教会活動が活発になり、1926年に Maryknoll Mission の教会として、大連に聖母海星 大連天主教教堂（Stella Maris Catholic Church in Dalian）が完成した。そのため、Maryknoll Mission は日本の満鉄やその社員などの協力を得ながら大連での宣教活動を実施している。こうした背景から同教団のアーカイブには中国で日本人とともに写る集合写真が複数保存されており、同団の中国での宣教の一端の様子が伺える資料となっている。また当時に満鉄統治下にあった戦前の満州の街並みや人々の様子を知ることのできる写真も多数保存されている。

さらに、コネチカット州にある Yale University の Divinity School（神学校）付属の Day Missions Library にも同大の神学校と関連する宣教師が日本で撮影した写真や収集した絵葉書などが多数保存されている。その中には戦前の日本の教会での祝祭や教会での裁縫教室や日本人宣教師、戦前の長崎の浦上天主堂の様子などを写した写真が多数含まれており、日本の魚市場や日本の伝統的な葬列など当時の習俗がわかる内容となっている。

このように米国の宣教団による日本や満州などでの活動がわかる写真資料が保存されている一方で、その逆に禅などを中心とした仏教の普及のために日本から米国に渡った日本の仏教団や仏僧に関する写真資料も多数保存されている。米国において仏教の普及を行った人物としては鈴木大拙（1870-1966）がよく知られているが、鈴木大拙と同門で、戦前期に米国で禅の教

義を広めた人物として Nyogen Senzaki (千崎如幻, 1876-1958) がいる。Senzaki は、幼少期に父母と死別し、浄土宗の僧であった養祖父に育てられた後に、一時は医師を目指したが19歳で出家し、その後、鎌倉の円覚寺で釈宗演 (1860-1919) に師事することとなった。釈は福井県出身の僧侶で円覚寺派管長を務めていた時の1893 (明治26) 年にシカゴ万国博覧会の一環として開催された万国宗教会議に臨済宗の代表として出席することとなり、さらに1905 (明治38) 年にはルーズベルト大統領と会談するなど、禪をZENとして国際的に広める役割を果たした (井上, 2000)。前述した鈴木大拙も釈に師事しており、同門であった二人は共に米国における禪の代表的な布教者となった。Senzaki は釈が1905 (明治38) 年の渡米した際の侍者として共に訪米したが、日本には帰国せずにそのまま米国に滞在して、同地での布教活動を始めた。その後も苦しい生活の中で布教を進め、「移動坐禅堂」を考案して、サンフランシスコやロスアンゼルスなどを中心に活動を行ったが、第二次大戦中は他の日本人とともに、ワイオミング州のハートマウンテンの強制収容所に収容された。戦後は再び移動坐禅堂を用いて布教を続けるとともに書籍も出版され、鈴木大拙と並んで米国における仏教の代表的な指導者となった後、1958年に米国で死去した (2008, Senzaki)。こうした境涯を遂げた Senzaki に関する資料は、UCLA の Charles E. Young Research Library に収蔵されている「Ruth Strout McCandless Collection on Nyogen Senzaki, 1895-2007⁴⁰⁾」に保管されており、書簡やエフェメラル、書籍、各種文書とともに複数の写真が保存されているが、その中には戦中の強制収容所の様子や交流した日系人との集合写真なども含まれており、Senzaki の活動や生涯、交友関係を知る手がかりを提供している。

また、禅宗だけではなく、日本の他の教団による仏教の伝道活動に関する写真も保管されており、Stanford University の Hoover Institution Library and Archives⁴¹⁾ に保管されている「Buddhist Church of San Francisco records⁴²⁾」には、日本の浄土真宗本願寺派 (西本願寺) が1898年に設立した Buddhist Church of San Francisco に関する資料が保管され、その中に同寺の活動を写した写真が保存されている。その後、同教会が中心となり翌1899 (明治32) 年に Buddhist Churches of America (米国仏教団) の活動が開始され、その後、本国の西本願寺の支援もあり会勢は拡大していったが、太平洋戦争の勃発により在米の日本人および米国国籍をもつ日系人は強制収容をされた。しかし戦時中もユタ州トパーズ収容所に本部を置き、その活動を存続させ、1944 (昭和19) 年の総会において、現在の名称に改称し、戦後は京都の教団本部と連携をとりながら会勢を再び拡大させた。Hoover Institution の資料には、これらの教団の活動の中心となった Buddhist Church of San Francisco の1910年～80年にかけての名簿や会計簿、書簡やメ

40) Ruth Strout McCandless Collection on Nyogen Senzaki, : https://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c8wh2vs5/entire_text/?msclid=2869fbebcea811ec83b5118402b94adc (Accessed: 22-04-01)

41) Stanford University Hoover Institution Library and Archives: <https://www.hoover.org/library-archives> (Accessed: 22-04-01)

42) Buddhist Church of San Francisco records: <https://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c8348s28/> (Accessed: 22-04-01)

モ、発行物とともに写真が保管されており戦前における同教会の米国での活動の様子がわかる資料となっている。

このように、米国には同国のキリスト教徒の宣教団の写真や、日本の仏教者や仏教団体の米国での布教の様子を伝える資料を保存している。前者においては戦前の着物姿の日本人が西洋式の教会の式典や活動に参加したり、逆に米国においては米国人が東洋的な儀式に参加している様子が見られ、双方の社会における異文化接触の様子がとらえられている。そして、それ以外の写真資料においても社会の光の当たる部分を写した写真が多数遺されており、歴史や社会の深部に目を届け、その多様性を理解する上では重要な写真資料が遺されている。両国における戦前の社会を視覚資料で見直す場合、社会の影の部分にも光をあてていくこのような資料を見直していくことが必要であろう。

2-6. 「⑦移住・開拓活動」と写真資料

前項において、米国に移住した Senzaki や日系移民の信仰の対象となった Buddhist Church of San Francisco などに関する写真資料について取り上げたが、本項ではそうした米国に移住した、日系1世などによる移住・開拓活動に関して米国に保存されている写真を概説する。これらの資料はハワイ州とカルフォルニア州を中心とした大学図書館や博物館、また日系人の歴史資料を保存し展示する Japanese American National Museum などに保存されている。

まず日本人の米国への移住の変遷を振り返ると、すでに明治初期からその動向を確認することができる。まず1868（慶應4/明治元）年に、米国の商人で駐日ハワイ総領事も務めた米国人 Eugene Miller Van Reed（1835-1873）が、日本人140人余りをハワイに砂糖農場の労働者として移住させた。これらの労働者は「元年者」と呼ばれ、日本人の米国圏への移住のさきがけとなったが、実質的に奴隷労働に近く、後に明治政府が高官を派遣して救済処置を施すこととなった。その後、明治政府は北海道開拓を奨励し、多くの農業従事者が北海道に移住することとなったが、1886（明治19）年に明治政府とハワイ王国は日本人労働者を出稼ぎ労働者として3年間ハワイ砂糖農場へ派遣する日布移民条約を締結し、1894（明治27）年までに約2万9千人の日本人がハワイへ一時移住した（仁保，2020）。そうした動向の中で、1890年代には北米に移住する日本人も増加し、1900（明治33）年には米国に移住した日本人の数が一万人に達し、カルフォルニア州を中心に日系一世による開拓が進行した。それに対し米国人社会では徐々に日本からの移民の制限を訴える声があがり、1908（明治41）年には日米の紳士協定によって日本からの移民が自主的に制限された。しかし、その後も米国への移民は増加したため、1924（大正13）年に合衆国移民法1924（排日移民法）が成立し、日本人の移民が全面的に禁止されが、それまでの間に日系人社会が形成されつつあり、1929（昭和4）年には、Japanese American Citizens League（日系市民協会）設立された。その後、1930年頃には日系移民の生活も安定してきたが、1941（昭和16）年に日米が開戦すると、前述したように日系人は強制収容所に収容され、苦難の時を過ごすこととなった（米山・河原，2015）。

こうした戦前の移民の様子を伝える写真資料を概観すると、ハワイ州にある University of Hawai'i at Mānoa Library に所蔵されている「Stanley Kaizawa Collection」に、日系二世である Stanley Kaizawa (1921-2007) の活動の様子を写した写真資料が含まれている。また米国本土については CSU (California State University) においては多数の日系移民に関する資料を保存しているが、近年ではそれらをデジタル化して公開する Japanese American Digitization Project が実施されている。特にここでは第二次世界大戦中における日系人の強制収容などに関する資料を中心として、多数の写真資料などを公開している⁴³⁾。

また、米国各地の図書館では、日系人が残した資料を公開している。例えば、UCLA (University of California, Los Angeles) Library では、日系一世で米国において実業家として活躍した Danzō Kiyohara⁴⁴⁾ (1881-1964)、や White River Valley Museum では日系移民である Okuda Family の大戦前のアルバム⁴⁵⁾などが保存され、また California State University Sacramento Library には Kikuyo Morimoto Nakatani (1903-1990) が残した資料の中に多数の写真資料が保存されている⁴⁶⁾。Nakatani は広島に生まれ1919年に渡米した後にカリフォルニア州アイルトンに定住し、1921年にサクラメント地方の農家である移民の Kinjirou Nakatani と結婚して、7人の子供をもうける。その中の長男の Kunio (1922-1945) は日本に戻り、第二次大戦中は戦艦大和の乗組員となって戦死しているが、同コレクションにはその Kunio からの手紙なども含まれている。その後 Nakatani は戦中においては家族とともに強制収容をさせられたが、戦後はロスアンゼルスに転居し、裏千家の師範としても活動した。これらの写真資料には日系一世であった女性の生涯について写真を通してわかるような内容になっている。

その他にもカルフォルニア州を中心に多くの日系移民の写真資料が保存されているが、Stanford University Library の Manuscripts Division にも、1910年にカルフォルニアのサクラメントに移住した Honda Family が残した950枚の写真と114枚の絵葉書などで構成されている資料が保存されている⁴⁷⁾。写真には家族の生活、街の様子、学校の集会、教会での催し、葬儀、結婚式、ボーイスカウト、懇親会などが写されている。そしてこれらの写真の中には戦時中に日系人が強制収容された Tule Lake War Relocation Center 内の様子を写した写真も含まれている。写真は日本とカルフォルニアが主であるが、それ以外で撮影された写真も含まれ、写真のキャ

43) CSU JAPANESE AMERICAN DIGITIZATION PROJECT:

<https://scalar.usc.edu/works/csujad-exhibit/introduction?path=index> (Accessed: 22-04-01)

44) UCLA Danzo Kiyohara Papers:

<https://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/tf367nb1rw/> (Accessed: 22-04-01)

45) White River Valley Museum

Pre-World War II Okuda Family Photograph Album: <https://wrvmuseum.pastperfectonline.com/archive/3B31B777-DE71-4AE6-8BC2-228523317820> (Accessed: 22-04-01)

46) California State University Sacramento Library Kikuyo Morimoto Nakatani papers:

<https://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c8j107ms/> (Accessed: 22-04-01)

47) Stanford University Library Honda family papers

<https://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c8rf628h/> (Accessed: 22-04-01)

プションは主に日本語で書かれ、はがきのキャプションは英語と日本語で記載されている。これらの写真も日本からの移住や米国での生活、そして大戦下での強制収容など、ある日系移民家族の歴史を写真で迎える内容になっている。このように特に日系一世やその子である二世の人々は移民後の重労働や戦争による強制収容など、厳しい体験をすることとなったが、それらの経験を知る手がかりとなる写真資料が多く遺されている。特に日系人の強制収容には黄禍論にも通じるアジア人に対する差別意識があることが指摘されており、こうしたアジア系の人々への差別意識は、現代においても根絶したとは言い難い。その意味からもこうした写真資料を通して日系移民の歴史や戦争が引き起こす苦難の記憶を想起していくことは日米の両方の社会で今後も必要であろう。

3. まとめ

前項までにおいて、在米日本関係古写真資料を「国際交流」や「異文化理解」の観点に立って、「①外交活動」、「②実業・財界活動」、「③研究・教育活動」、「⑤災害記録及び支援活動」、「⑥布教・伝道活動」、「⑦移住・開拓活動」の6点より考察した。各資料からはそれぞれの分野ごとに日本と海外で様々な交流があり、それらが現代日本社会の基礎を構築していることがわかる。これらの事柄は文書資料などを通して捉えることができるが、写真などの視覚資料を用いることで、より実態に即した交流の様子を捉えることにつながると言えよう。また、写真という媒体を使用することで、異文化に属する者同士がより近づく機会を得たことや、同じフレームの中に写ることによって、両者のつながりを視覚的に表し、その紐帯が深まる効果を発揮している例も多数見受けられる。こうした写真の効果に自覚的にありながらも、写真が果たした国際交流や異文化理解の意義について再評価をしていくことが必要であろう。また本考察では、「④文化・芸術活動」、「⑧その他」などは紙幅の関係でとりあげなかった。しかし④の文化・芸術活動の側面からも、戦前より日米では様々な文化交流が行われており、その様子を写した写真も多く存在する。例えば、The Metropolitan Museum of Art⁴⁸⁾には Edward Steichen (1879-1973) と並んで、ファッション写真家として知られる Adolf de Meyer (1868-1946) が戦前に日本で撮影したとみられる東京や京都などを題材とした写真が数多く保存されている。ファッション写真の世界を切り拓いた高名な写真家が訪日時に日本をどのように写真のフレームに収めたかを考察することは20世紀のビジュアルデザイン史を紐解く上でも重要である。そのためこうした他分野における異文化交流を示す写真資料を再評価していくことも重要であろう。

さらに、「⑦移住・開拓活動」で触れたように、米国には日系移民に関する写真資料が、カリフォルニア州を中心に多数遺されている。これらの人々の中でも特に日系一世と二世は日本

48) The Metropolitan Museum of Art: <https://www.metmuseum.org/> (Accessed: 22-04-01)

で生まれ育った体験と、米国に移住した経験の2つを持っており、これらの人々が遺した資料には、両方の文化で撮影された写真が含まれている。そのため移住後に移民の人々がそれぞれの文化とどのような距離感をもって過ごしたかを視覚的に知る手がかりを提供している。また Nyogen Senzaki の項において触れたように、日系移民は第2次世界大戦中に強制収容をされた経験があることはよく知られているが、それは米国史においても暗い影を落とす一幕となっている。日系移民に関する資料群の中には、強制収容に関する写真資料が多く遺されているが、COVID-19の感染拡大によって改めて認識されたアジア系市民への人種的な差別を防ぐ上でも、こうした過去の「負の記憶」を写した写真を共有し継承していくことが必要である。このような課題を含む日系移民の写真資料については、改めて別稿で論じたい。

いずれにしても、在米日本古写真資料には、現代の人々にも様々な問を投げかける課題が含まれているが、これらを広く共有し、写真内容を理解できるようにするドキュメンテーションが必要であろう。それらには、写されている地域や人物、機関や組織などについて可能な範囲でわかる解説がなされることが重要である。また、アイヌの項目でみたように、同じ題材を扱った写真が全米の複数の機関で保存されており、それらを横断的に検索できる機能の充実化が必要である。また、本調査においては、Harvard University Libraryなどの主要機関においては画像資料を連携して比較などを可能とする IIF (International Image Interoperability Framework) などの機能の実装を確認したが、在米日本古写真資料を所蔵する多くの機関ではこうした機能は未実装であり、こうした機能への検討も必要であろう。

そして、本論においては、主に6点の視点から考察を行ったが、各項目を横断する人物や機関が登場した。例えば、米国大統領の William Taft については①の日露戦争後の使節団に参加し、またその弟が②の大正期の米国政財界訪日団に加わっていた。また Rockefeller 家やその財団については、Rockefeller 家自身が財界人として複数回訪日し、様々な写真資料を遺すとともに、Rockefeller 財団については日本において多数の学術団体に支援をしており、その成果が写真資料として保存されている他、同財団の調査により日本の様々な大学の写真が遺されている。このように、特定の人物や機関などを通じて多くの写真資料を辿れるような視点の提供が生ざれると、国際交流をより多面的に捉えられると考えられる。

さらに、日本の国立国会図書館では一部の海外の機関も含めた日本に関する資料を検索できるサイト JAPAN SEARCH⁴⁹⁾ などの運用が開始されているが、こうしたサイトと海外のデータベースを連携させることで、日本に関する写真資料を横断的に検索できることも必要であろう。ただし、調査を実施した米国の地方の機関ではまだカタログの公開や資料の電子化などは実施していないところが多く、そうした資料のデジタル化を促進させる支援も必要であろう。いずれにしても、これらの写真資料が現代になげかける意味についても改めて再評価し、過去の交流について考えを深めていくことが肝要である。

49) JAPAN SEARCH: <https://jpsearch.go.jp/> (Accessed: 22-04-01)

参考文献

- 謝辞：本研究はJSPS科研費17K00470の助成を受けるとともに、米国内の多くの図書館、博物館、文書館と添野勉氏、中川裕美氏の協力を得ました。協力を得たみなさまに心より感謝申し上げます。
- Assmann, A.: *Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses*”, Verlag C. H. Beck Kulturwissenschaft (2006) 安川晴基 訳『想起の空間—文化的記憶の形態と変遷』水声社 (2007).
- Burke, P.: *Eyewitnessing The Uses of Images as Historical Evidence*, Cornell Univ Press (2001).
- 諸川春樹 訳『時代の目撃者—資料としての視覚イメージを利用した歴史研究』中央公論美術出版 (2007).
- Hitchcock, R.: *The Ancient Pit-dwellers of Yezo*”, Report of the U. S. National Museum for the Year Ending June 30, 1890: pp. 417-427 (1891).
- Hitchcock, R. : *The Ainu of Yezo, Japan*”, Reports of the U. S. National Museum for the Year Ending June 30, 1890, pp. 429-502 (1891).
- Herbert-Gustar A. L., Nott P. A “John Milne : Father of modern seismology” Paul Norbury (1980) 宇佐美竜夫 訳『明治日本を支えた英国人—地震学者ミルン伝』日本放送出版協会 (1982).
- 波多野勝・飯森明子『関東大震災と日米外交』草思社 (1998).
- 井上禅定『釈宗演伝—禅とZENを伝えた明治の高僧』禅文化研究所 (2000).
- 松岡弘之『ハンセン病療養所と自治の歴史』みすず書房 (2020).
- 室田保夫『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』ミネルヴァ書房 (2006).
- 犬塚孝明・石黒敬章『明治の若き群像 森有礼旧蔵アルバム』平凡社 (2006).
- 岸上伸啓・佐々木史郎「19世紀末から20世紀前半にかけてのアイヌ研究とアイヌ資料の収集—ドイツコレクション展示の背景として—」『千島・樺太・北海道アイヌの暮らし：ドイツコレクションを中心に』アイヌ文化振興・研究推進機構編, pp. 127-134 (2011).
- 小谷凱宣 (編)『在米アイヌ関係資料の民族学的研究』名古屋大学教養部, (1993).
- Longfellow, C Laidlaw, C: *Charles Appleton Longfellow: Twenty Months in Japan, 1871-1873*, Friends of the Longfellow House (1998) 山田久美子 訳『ロングフェロー日本滞在記—明治初年, アメリカ青年の見たニッポン—』平凡社 (2004).
- 無らい県運動研究会『ハンセン病絶対隔離政策と日本社会 (無らい県運動の研究)』六花出版 (2014).
- 西澤泰彦『東アジアの日本人建築家—世紀末から日中戦争—』柏書房 (2011).
- 仁保島村『ハワイ日本人移民史1868-1952 (明治元年—昭和二十七年)』ハワイ移民資料館 (2020).
- Pflueger, L: *George Eastman: Bringing Photography to the People*, Enslow Pub Inc (2002).
- Senzaki, N. Chayat, R. Shimano, E: *Eloquent Silence: Nyogen Senzaki’s Gateless Gate and Other Previously Unpublished Teachings and Letters* Paperback, Wisdom Publications (2008).
- 佐々木隆「明治時代の政治的コミュニケーション2」『東京大学新聞研究所紀要』pp. 117-193 (1985).
- 鈴木妙「井深八重：ハンセン病の看護に捧げた生涯」『埼玉医科大学短期大学紀要』No. 30 pp. 1-15 (2019).
- Tuhy, J: *Sam Hill—The Prince Of Castle Nowhere*, Timber Press (1983).
- 武田龍精『親鸞とアメリカ—北米開教伝道の課題と将来—研究叢書「親鸞思想と現代世界」』永田文昌堂 (1996).
- 研谷紀夫・川島隆徳「Digital Cultural Heritage を用いて家族写真の特性を明らかにする方法の提示とその検証に関する研究」『アート・ドキュメンテーション研究』NO. 21, pp. 3-21 (2014).
- 植木哲也『植民学の記憶—アイヌ差別と学問の責任』緑風出版 (2015).
- 上田宏範 (編)『千島アイヌロメイン・ヒッチコック 滞日二か年の足跡：社団法人樺原考古学協会研究成果』(2006).
- 宇仁義和「ロミン・ヒッチコックが1888年に撮影した北海道と色丹島の写真と旅程」『北海道民族学』,

pp. 57-74 (2015).

輪倉一広『司祭平服と癩菌』吉田書店 (2015).

吉川秀夫『科学は国境を越えて：ケリー博士評伝』三田出版会 (1987).

米山裕 河原典史『日本人の国際移動と太平洋世界―日系移民の近現代史』文理閣 (2015).

理化学研究所百年史編集委員会『理化学研究所百年史』理化学研究所 (2018).

米澤晋彦「畑井新喜司による東北帝国大学における学術研究体制の整備」『東北大学史料館紀要』No. 13, pp. 13-27 (2018).